

戦場カメラマン・渡辺陽一さん「世界からのメッセージ」



昨年11月28日、戦場カメラマンが代名詞の写真家、渡辺陽一さんが来町し、東川中学校で「世界からのメッセージ・命と愛と絆」と題して講演を行いました。

アフリカ・ザイール、コンゴ、ロシア南部チエチェン共和国、アフガニスタン、ソマリアなど、世界の紛争地帯で写真を撮り続けてきた経験を独特の大きな身振り、手振りを交えて話しかけ、生徒への説得力も大きかったよう。「世界の戦争を見て気づいたことがある。戦争をしている国同士では戦争を止めることが出来ない。日本のように家族で買い物に行き、家族でご飯を食べ、家族みんなでテレビを見られる。

そんな国は世界では少ない」。

「戦争の犠牲者はいつも子どもたち。イラクでは劣化ウラン弾が何発も使われ、お母さんが水を飲むことで、おなかの中の赤ちゃんが被曝（ひばく）した。家族の見える前で男の子の髪の毛が抜けていき、どんどんやせ細ってこの子は亡くなった」と写真を見せながら戦争の悲惨な現状と平和の尊さを訴えました。

「幸せとは、やりたいことができること。家族がいつも一緒にいることができ延びる力。そしてやりたいことに一歩踏み出した時、それが幸せ」などと話し共感を呼んでいました。

大学生主催のクロスカントリースキー「旭岳カップ」



昨年12月5日、旭岳温泉地区のクロスカントリースキーコースで、合宿中の大学生がシーズン・インのこの時期に毎年自主主催している「第7回旭岳カップ」大会を開きました。

合宿中の選手たちがシーズン初めの合同タイムレースとして開きました。日大、旭川大、京都産業大、立命館大、東京大、東京工業大の国内6大学の選手、JR北海道、平SCなど社会人チーム選手に混じって、韓国ナショナル

チーム、同ジュニア強化選手、同バイアスロン強化選手が初めて参加。日韓両国の選手約60人がタイムを競いました。

6大学の学生が持ち回りで混成の実行委員チームを編成し、すべて学生運営の手作り大会。賞品はスキーウェア、板、ブーツ、ワックスなどのメーカー、協賛社からノベルティグッズの提供を受け、中にはうれしい貴重な賞品もいっぱい。シーズン開幕を告げる励みになったようです。

診療所でおいしいバナナ熟したよ

町立ひがしかわ診療所（木下透所長）のバナナの木から、昨年12月バナナの実1房5本が見事に熟しびつくり。

「たわわ」とはいえないまでも、秋ごろから大きくなり始めた小さな房は、1本10センチほどまで大きく実り、黄色く熟して「うん、おいしい！」。

2年前、中田宏志副所長の奥さん、千明さんが、お話し会の活動仲間か

ら預かり、以来観賞用の鉢植えとして来院者待ち合いロビーに置いて世話をしてきました。

樹高約40センチの幼苗だった木は、今や小さな幼児の頭を越えて樹高約140センチほどに大きく育ち、見事な葉が生い茂るほど。「今年の秋は、きつと大きくおいしいバナナを食べられるぞ」と今から2年目の収穫を心待ち。

